

20年前の出会いから 始まった ビーンズふくしま

子どもの不登校支援を大学教員の立場から始めた松下先生と、 お子さんが不登校だった若月理事長の対談

松下●不登校が登校拒否と言われていた時代、不登校支援の第一段階として、『ふくしま登校拒否を考える会』という親の会で、フリースペース「でくの坊」を1990年から1999年までやっていました。

若月●我が家の長男が不登校になり、「ふくしま登校拒否を考える会」と出会う中で「でくの坊」の存在は聞いたんですが、もう活動は終わりかけの時でした。

松下●そうだったっけ？「でくの坊」は通っていた子どもたち自身が終わりにしようと決めて、街中広場での「ライブ&フリーマーケット」イベントが解散式になったんです。その前後くらいの1998年に当時学生だった小林さんたちが「ふくしま登校拒否を考える会」にアプローチしてきたんですよ。不登校の支え方はある種知っていたし、不登校でも大丈夫だということは子どもの成長を見て感じていた。フリースクールでやるなら、保護者やスタッフだけでなく、市民の力を借りて作ろうと話したんです。

若月●フリースクールをつくる動きを知って「やったー！」と思いました。長男の不登校は親にとって青天の霹靂。「登校拒否」は言葉として知ってたけど、自分の子がそうなるとは思っていませんでした。親の関わりが悪いんじゃないかと思ったり…。なんとか学校に行かせよ

うと連れて行った時、顔面蒼白で涙を流した息子を見て、無理して学校に行かせられないと思い、どうしようかと考えた時に、家庭の中だけではできない経験、いろんな人に会うことや色々な体験をすることができる場所が欲しいと思いました。

松下●子どもが充実した生活を送るために、学校が十分に機能を果たせないのであれば、大人はどうサポートしたらいいか、ずっと考えていた。それは、不登校とか、学校に行っていない行っていないに関係なく、子どもが本当にやりたい



オープンイベントで仮装しているスタッフとボランティアの面々

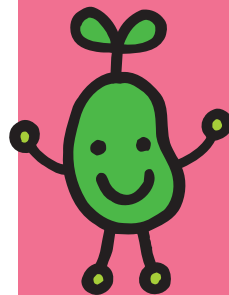


松下行則 × 若月ちよ

ビーンズふくしま初代代表。
現在、福島大学人間発達文化学類教授

不登校の子どもを持つ親として、
フリースクールビーンズふくしまの設立に関わり、
2001年代表に就任後、
現在「NPO法人ビーンズふくしま」理事長。

ビーンズ 通信 vol.92



●発行日/2019年3月10日

●発行元

特定非営利活動法人

ビーンズふくしま

〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F

TEL&FAX 024-563-6255

URL <http://www.beans-fukushima.or.jp/>

E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

ことをやれるようにするためです。加えて、私は若者の仕事づくりも考えていた。子どもたちの居場所を作りたいと奔走する若者たちの気持ちを応援したかった。だから、「フリースペース」から「フリースクール」にしたところもあります。

若月●確かに、「スクール」だと親の安心にはなるかもしれないです。私としては、子どもたちが楽しく活動できる場所があることが重要でした。せっかく学校に行っていないのだから、学校ではできない経験をしてほしかった。安心できる場所で、自信を取り戻せるような。自己表現が苦手だった息子が、自己

表現できるようになっていったのは、仲間・スタッフとの関わりの中で、認められる機会が増え、自信を取り戻すことができたからだと思います。

松下●子どもたちと接する時、大切にしていることは「普通の人」であり続けることです。馬鹿な話もするし、子どものことをいじくりまわして、煩がられることもあります。そういう関わり方を大事にする。研究者でも教育者でもなく、子どもが大好きな大人がいるよ、という感じで。

自分たちができることはたかが知れている。たかが知れているけれど、そこでいかに子どもたちを支えるかを考えていきたい。一番基礎的な能力は、人と関わる力。誰とでも関わる力は、関係を作ること躊躇しないような、ゆったりとした組織の作り方も大切になると思っています。

子どもが「ジャックと豆の木」みたいに、芽が出てぐんぐんと伸びていくイメージ

人って、一度レールから降りてしまうと戻るのが大変ですね。私も仕事を辞めて、ドロップアウトした時、すごく孤独な気持ちを感じました。今でいう「ひきこもり」に近いかな。もともと教員になりたいと思ったのは、どっちかという目立つ子どもではなく、王道から外れた子に光を当てたいという想いがあったからです。フリースクールはもともと知っていて、偶然、ラジオで廃校の再利用に困っていることを知り、むくむくとアイデアが沸いたんです。私のしんどかった気持ち、教員としての信念、場所があれば「学校みたいなもの」を作れるかもしれないと思ったんです。

当時、フリースクールは学校からすると敵のようなものでした。だからこそ、怪しげでなく、子どもが誇りを持って通えて、学校から見ても「こんな感じなら大丈夫だな」と思ってもらいたかった。名前は子どものイメージから付けました。子どもは、ぐんぐん伸びる芽。だから「ビーンズふくしま」になりました。

子どもたちと一緒に街頭募金をやったことはよく覚えています。大人だけでなく、そこに子どもが入って作った。だから、あの頃のメンバーは結束が強いと思います。20年も付き合い合えば「関わりたくない」って思う時期もあるじゃないですか。でも、「離れていてもつながっている」感覚、みんなにもあると思うんです。

自分自身がいろんなチャンネルを持つこと、多様さを持って生きること。

子どもには、大人自身の人生観や生活感、社会との関わり方が反映されると思っています。働き方、社会のことを知って生きていくことを、どのように子どもたちに伝えていくか。多様な価値観を持っている大人と生きることで子ども自身のチャンネルも増え、強く生きることにつながる。

だから、多少、子どもが嫌な思いや苦労

をしたとしても、いろんな人との関係づくりは必要なことだと思う。どんな形でもいいから、社会とつながる機会を作らないと、守られた生活に固まってしまう。アルバイトやボランティア、地域とか、まぜこぜにして、多様な経験から学ぶことでしか得られないものもあるから、たくさんチャンネルが大切だと思うんです。

目標とする社会はみんなHappy。みんな違ってみんないい。

私が始めたことが20年も続き、ここまでできたことが心から嬉しく、自分も頑張ろうと原動力になります。ビーンズでの経験は自分の中で脈々と生きていて、学校の中に生活・学びの場を再現したいと思っています。

多様な学びが大切という社会になることは間違いないし、学校の形も変わっていく。神奈川県では、フリースクールが学びの場としての選択肢になっています。これからも需要は増えていくと思う。フリースクール側も、「こういう場は必要な



小林良平
ビーンズふくしまの立ち上げ時のスタッフ、2001年まで勤務。2007年より神奈川県公立小学校勤務し、現在公立小学校総括教諭。

んです」って訴えてほしい。学校もフリースクールもお互いに、みんなが暮らしやすく、認められる社会を実現するために変わっていけるんじゃないかなと思います。

20年前、若者としてフリースクール立ち上げの中心だったお二人に 当時を振り返ってもらいインタビューしました



太田町のこのビルの2Fからビーンズふくしまがスタートしました



日々のプログラムを考え中のスタッフ



フリースクールのいやし系アイドルだったうさぎの「リトル」



ビーンズふくしまを創った若者たち



20年前の代表 松下先生



フリースクールでのひとこま



オープンイベントを進行する中鉢さんと小林さん

学校に行っている、行っていないに限らない、多様な学びの場をつくりたかった。

福島大学1年生の頃から、「セツルメント」というボランティアサークルで、子どもと関わり、学びの形は非常に多様で、社会や家庭の中で学ぶこと、いろんな人との関わりの中で得られるものがたくさんあると気づきました。そういう経験をたくさんした方が、人生豊かに生きられるんじゃないか。学校教育の役割や存在は大きいけれども、子どもが学んだり、経験したり、人と関わるってことは、学校に限られたものではないと思ったんです。多様な価値観を身に付けられる「関わり場」を豊かにするという発想からフリースクールは始まりました。

当時、不登校になっている子どもたちが13万人くらいはいたのかな。でも、彼らを特別視するわけではなく、子どもの居場所、関わり場、学校にこだわらないこと

をしたいと思っていました。もちろん、学校に行くことができないが故に、いろんな経験、友達との関わりが希薄になっていることは理解していました。経験する場としての学校の意味は確かにあったけれど、学校に行っている、行っていないに限らず出来ることがしたかった。

フリースクールを作るとき、こじんまりとやっても私塾みたいになってしまう気もして、自分たち学生のカジュアルな感じが、っていう感覚があった。今まで、私がやってきた活動のベースは、地域の中でいろんな人が関わりながら、その中で子どもが育つということ。そんな開かれたものにしたいと思っていたので、自分たちや親の会だけでなく地域の人たちにも声を掛けて始めました。

はじめは「おもしろ学園」

フリースクールを始める前、1999年の1月からは、「おもしろ学園」ていうのを週1~2回、13時~17時まで、やっていました。「ふくしま不登校を考える親の会」つながりで、最初は5人の子どもたちが来てましたね。勉強ではなく、ちょっとしたためになりそうなことをミニ講座のような形で、工作、料理、鬼ごっこをしていました。小林さんと私で毎回何をやるか考えて提供スタイルでした。子どもたちは元気がよく、自分の世界を持っていて、その場にいることをすごく楽しんでいる様子でした。

「居場所づくり」はまだ、道半ば。私たちは常にチャレンジし続けている。

常にチャレンジし続けてきたからこそ、今のビーンズがあります。施設や機関があるからと、既存の枠組みの中だけで与えられたことを粛々とやるんじゃなくて、自分たちが働きかけることで「できるんだ」という動きを作れたんじゃないかと思っています。こういったビーンズの働きかけ方に、共感してくださっている方が増えてきているように思えるので、「そんなの無理」ではなく「私たちもできるかも」という輪が形となって広がってほしい。



中鉢博之
ビーンズふくしま立ち上げからのスタッフ、現在NPO法人ビーンズふくしま事務局長。

アンケートへのご協力、ありがとうございました



いつもビーンズ通信をお読みいただき、ありがとうございます。ビーンズ通信は、ビーンズふくしまがスタートした翌年2000年に初号を発行し、本号で92号目を迎えます。カラー紙面に変更した83号から、アンケートのご協力をいただけてきました。

ご回答いただいた皆様から、「ビーンズふくしまの活動について知ることができた」との声、カラー紙面になったことで、「読みやすくなった」との声をいただきました。また、会員の方をはじめ、学校や教育委員会の方々、各自自治体・保健福祉事務所・病院関係・NPO法人など、様々な立場の方からご回答いただき、皆様の声に励まされました。多くの方々にお読みいただいていることにあらためて感謝いたします。

皆様のご意見ご感想を力に、これからも皆様に伝わりやすい紙面作りに努めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

平成30年度「新しい東北」復興・創生顕彰を受賞しました

このたび、ビーンズふくしまは、上記顕彰を受賞いたしました。

震災により被災した子どもの支援やその後の子育て環境を巡って、あまりにも多くの課題がある中、仮設住宅での子どもの居場所づくりや学習支援、心のケアを必要とする県外避難親子の支援、県内に戻ってきた親子に対しての放射線や子育て生活の中での不安の傾聴やケア、県内外の避難者、福島で暮らす地域の方々と結ぶ避難者交流拠点の運営、福島の子育て環境の再生を目指すための情報提供や支援者支援など、誰も経験したことがない多岐にわたる課題に1つ1つ取り組み、道筋をつくってきたことを評価いただいたものと嬉しく思います。

東日本大震災から8年。目に見えて、着実に復興してきているものもあれば、時間とともに新たな課題が出てきたり、複雑化してきているものも少なくありません。この受賞を励みに、引き続き、福島での子ども支援・若者支援を行ってきた団体として、これからもこの課題と向き合っていきたいと思っております。



2018年度 赤い羽根共同募金「地域課題解決型募金」へのご協力ありがとうございました

ビーンズふくしまは、子どもや若者が、安心して人と繋がり、学ぶ挑戦ができる地域の居場所を創っています。その活動に対して、昨年度、赤い羽根共同募金「地域課題解決型募金」活動を行い、皆様の温かいお気持ちのおかげでたくさんの募金を頂くことができました。

今年度の居場所活動に、募金を活用させて頂きました。

●教科書や参考書などを購入／フリースクールでの毎日の学習や、高校受験を控えた子どもたちの学習に使用し、受験生全員が志望校への進学を叶えることができました。

●調理器具やキャンプの用品、園芸用品やスポーツ用品などを購入／フリースクールの調理実習、子ども食堂よしいだキッチン、サマーキャンプなど、子どもや若者が多様な体験を行うことができました。

そして、何よりフリースクールや子ども食堂など地域の居場所を継続して開催することができ、そこに集う子どもたちは、笑顔で溢れ、友だちや仲間とも繋がり、これから生きていくための活力や、自己肯定感、自信を育むことができたと感じています。

皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

今年度も赤い羽根共同募金「地域課題解決型募金」実施中

貧困家庭の子ども・若者の孤立状態の解消を目指し、安心できる「居場所」を地域に作り、体験活動を実施したいと思っています。

受付期間は3月31日までです、応援よろしくお願いたします。



●ビーンズふくしまのホームページはこちらへアクセス <http://www.beans-fukushima.or.jp/>